Opera レーゲンスブルク劇場シーズンオープニング《カルメン》

9月18日に「劇場祭」で多くの市民を劇場に集めた翌週の日曜日、ビゼー《カルメン》でオペラの新シーズンが始まった。劇場前広場に舞台上の映像を無声で映し出し、貸しイヤフォンを200個用意して、劇場に入れない市民にもオペラを楽しんでもらうという初の試みを行っていたのには好感が持てた。

幕が上がると、〈ハバネラ〉を口ずさむカルメンがズニガ達に暴行され、そして〈序曲〉が始まった。音楽総監督の阪哲郎が左手で明確にタクトを示してもなお走り気味の、意欲満々なオーケストラだったが、歌が入ると次第に落ち着きを取り戻した。ヘンドリク・ミュラーの演出は、嫌悪と暴力に支配されて甘さがゼロなため、それに合わせて音楽的にも緩みを許さないテンポに貫かれていたが、スビト・ピアノ（ボリュームを突然落とす）やクレッシェンドなどで美しさを際立たせていた。合唱の膨らませ方や色付けは効果的で、歌心の足らない歌手のフレーズを左手の微妙な動きですぐに甘くさせる阪の技術が光った。ドン・ホセの母親を登場させたり、オリジナルの台詞も挿入して努力が見えるのに空振りばかりの演出にはブーイングも飛んだが、第2幕、特に「5重唱」の振り付けと音楽のスピード感はミュージカルのように高レヴェルのエンターテインメントだった。題名役のヴェラ・エゴロヴァ、ドン・ホセのインジア・ゴン、エスカミーリヨのセイムール・カリモフから小さな役まで、華はないが、実力派ばかりの若手歌手陣も、音楽的完成度を上げるのに貢献していた。（中 東生）

第2幕の「5重唱」から ©Jochen Quast